

弘南寮時報発刊について

寮生の自由な考えや当時の時世を反映した物語などを自主的な投稿を小冊子として寮生全員に配布されていた。すべて手書きのガリ版刷りです。諸先輩が努力と苦勞して作成した様子が窺え、当時を知ることが出来ます。

下記 3 年分の資料が集まっている。全内容のご披露は紙面の関係で割愛しますが、以下にタイトルと一部の内容をご紹介します。—1951 年、1953 年、1956 年—

○1951 年 (S26)	弘南時報再刊に寄せて	ある戯曲の前奏曲
	学寮の前奏曲	学寮の自治についての一考察
	映画「オルフェ」を見て	乙女の如き感傷
	乙女の如き感傷	二つの「女の一生」
	或る友へ	詩四編
	現実としての原子力	映画雑感
	日常小感	セクショナリズム解消
	随想	清酒
	アンリ・マチス展を観て	思い出
	自動車を観るのは楽しいことだ・特に横浜は	
	コエヲ立テテヨンデクダサイ何べんも	編集後記

上記の中で「弘南時報発刊に寄せて」の内容を以下にぬきだしました。(原文のまま)

寮祭を祝して皆んなの手になる冊子を持つを得たことは非常に嬉しことである。緑濃くなった裏山を眺め乍らつくづく寮生活の楽しさを考える。何事にもあれ事の始めには勇気が必要である。勇気を奮うと割合スムーズに進むものである。かくして吾々の弘南時報も益々発展する。凡そ我々の生活全体は例えばこの小冊子の結果のみが重要でなくそれが生れて来るプロセスが大切でありその楽しさ苦しさが立派なものだ考える。そしてその作品について批判し合い語ることは我々若い者にとって此の上ない幸福であれ特権であると思ふ。この偽満に溢れた世の中で真実に生き様とすればする程暗い谷間に落ち込み地上の光から遠ざかりて行く様な生活の中で自由な光を来めたいと思うとき この冊子の果す役割は大きいと確信する。物事を正しく理解する事は民主主義の根本的要因である。吾々はこの冊子を通して吾々の生活の糧となるものとり出したいものだ。それは将来へのスプリングとなると信じてゐる。幸い編集諸兄と寮生の熱意と努力で腸光うらかな初夏にこの喜びを持ち得たことを皆んなで喜びたいと思う。編集諸兄に感謝して序文にかえる。

○1953 年 (S28)	寮祭委員長挨拶	寮長挨拶
	学問と生活	アンケート
	詩——X 氏のレポート	一とき
	感想——	実習日記より
	閑人の偶感	梗概 (あらすじ)
	女かつぎ屋の話	弘南寮アンケート
	反省と絶望	詩——水仙
	テニス	弘南寮先輩名簿

○1956 年 (S31)	第 10 回寮祭に際して	雑感
	吾輩の弘南寮徒然草	下駄
	四寮イロハ骨牌	徒然草現代版
	尾瀬を楽しむ	二寮寮祭雑感
	角使いの名人	消えない映画
	納豆の歌	寮の虫いろいろ
	星	或る娼婦の話
	大いなる疑問	薬師寺
	ヨウ子 (創作)	青梅の実 (創作)
	かすみ	

上記の中で抜粋

二寮寮祭雑感 伊勢本幸雄 (35 造船)

寮祭とは如何なるものか、僕には先輩の話でおおよそわかっていたが、想像以上に面白かった。提灯のついた門を入ると庭木があっただけ。なんだか本寮とはだいぶ様子がちがう。第一、庭が広いし、建物も感じが違う様だ。舞台は廊下とその奥の空で出来ていた。

沢山の見物人、小さなかわいい子のバレエ。急にコンパのことが思い出された。誰かが「寮祭は近所との親睦からもやるべきだ。」と主張していたが、その通りだ。

「歴史の重み」とふ名の演劇だった。どうせ近所の子供がみるのだから、悲劇的なものは受けないと聞いていたが、とんでもない。あんなに騒いでいた子供達がシーンと静まりかえったんだから。原爆娘と中共帰りの引揚とにまつわる悲劇がその内容であるが、たしかに当を得ている。演技がすばらしいんだ。素人である寮生が、あれまでに劇をこなしているとは、敬服せざるを得ない。たしかに見物人になにか、そう、戦争に対する憎悪を強く与えたに違いない。本寮の演劇もなにかを見物人に与えるようにしたいものだ。

ファイアストームのの貧弱な事、人数も少ないがまとまりがなく、ファイトがない。しかも火がなかなかえないときている。コンパでも「ファイアーストームは元気がなく、だらけている。」というのに対し、誰かが「自分が面白くなければ、なにもはりきる必要なんかないよ。だらけてもいい。」と云っていたが、どうしても納得がいかない。寮にいる以上個人生活も大切だが、寮全体でなにかする時には、ある程度個人を犠牲にしても、いいのではないかとそんな気がしてならない。それにしても、四つの寮生が集って、ファイアーストームを公演しあい、歌い合うことは、いいものだ。僕は文句なしに、寮祭はやるべきと思って、門を出た。